

後藤梨春編著の出版物と書肆鶴本

— 『温泉名勝志』 『草の螢』 『芭蕉翁行状記』 を中心に —

吉 田 宰

一、はじめに

近世中期の本草学者・後藤梨春(注1)は、元禄十五年(一七〇二)に生まれ、明和八年(一七七二)四月八日に没した江戸の人である。彼は能州七尾城主・多田蔵人義国五世の子孫で、多田義方(注2)の男。名は光生・光寧、字は梨春、号は梧陰庵・名張湖鏡・張朱鱗など。田村藍水に本草学を学び、蘭学も修めた。また、江戸神田佐久間町に創設された多紀氏の私立医学校・躰^{せいじゆかん}寿館の都講として本草学を講じた経歴も持つ(注3)。さらに、梨春が著した博物図譜『随観写真』(宝暦七年(一七五七)自序、写)にみられるように、その学識は博物学的傾向も持つ。一方、こうした学問的な活動以外では、『都老子』(宝暦二年(一七五二)刊)や『竜宮船』(同四年(一七五四)刊)

といった戯作も執筆しており、これらはともに漢字平仮名交じり文かつ挿絵つきで書かれている。前者についてはかつて拙稿(注4)で梨春の本草学と老子の思想との関連性を指摘し、本草学者の梨春が老子を踏まえた著作を執筆した必然性を明らかにした。また後者については、談義本の評判記である『千石籥』(宝暦四年(一七五四)刊)において、本書が惣巻頭の著作として掲げられていることから、当時の談義本界における本書への注目度の高さを窺い知ることができる(注5)。

さらに、別の拙稿(注6)で指摘したように、藍水門下の平賀源内が戯作『根南志具佐』を執筆するにあたって、梨春の『随観写真』に掲載されるカップパ図を利用するなど、梨春と源内の本草学を介した交流も明らかとなっている。

以上のように、当時の文芸界において梨春は少なからず影響力をもった人物であったにもかかわらず、彼の執筆活動に関する研究はあまり進んでいない。

そこで本稿では、梨春が編著者として携わった出版物について書肆との関わりから考察を深めることで、梨春の執筆活動に関する研究ならびに書肆研究を進展させることを目的とする。

二、現存する梨春編著の出版物

まず梨春編著の出版物のうち、現存するものを確認しておく。なお、以下に掲げる書誌情報の依拠資料については本稿末尾に一覧を付した。また論旨に関わらないと判断される求版本等は除外し、筆者未見の資料については「日本古典籍総合目録データベース」（国文学研究資料館）を参考に書誌情報を記した。その他、とくに断りのない限り、以下に記載する印は刻印（墨刷り）で、論旨に関わるものだけを翻字した。

○『河豚禪』（二冊）享保十三年、刊 ※筆者未見

本書は後述する「梨春先生撰述書目 望雲堂」および「梨春先生編輯書目 梧陰庵」にもその書名が掲載されている。

○『春秋七草』（二巻一冊）

序末「享保己酉春分日梨春書於梧陰庵／印」。
刊記「寛保二^{壬戌}正月中旬／梨春先生著／梧陰雨編／竜宮船／嗣出」。

本書の巻末には、「梨春先生撰述書目 望雲堂」として、計十八点の書目を掲載する。

○『本草綱目補物品目録』（二巻二冊）

序末1「大清乾隆癸亥仲春望／閩中三山董寧宜一序／印」。

序末2「寛延辛未年正月 江都望三英」。

序末3「享保戊申春分日東都原光生書於梧陰庵／印」

／膝守幹写印」。

跋 末「宝曆壬申林鐘／信陽 膝守幹／印／平惇信書印」。

刊記「宝曆二年壬申三月望／東都桜田和泉町／書肆鶴本平蔵梓行印（朱印陽刻「常／春」）」。

本書の巻上巻頭には、「梨春先生編輯／物品目録／東都 望雲堂常春蔵板印（朱印陰刻「常春／之印」）と記載されたもの（薄朱色・刷・魁星印あり）が綴じ合わされておられ、表面左端の上下二ヶ所にみえる穴の跡から、これはもと見返しであったと思われる。また、本書の柱には「鶴本常春」とある。

○『都老子』（四卷四冊）

見返し「都／老／子」。

序末「寛延四辛未五月中旬東都張朱鱗書於□松館（龜巻）

／印」。

刊記「宝曆二年^{壬申}正月／画工 勢月堂 蘭溪印／東

都／書肆 桜田和泉町 鶴本平藏印（常／

春）」。

本書の卷三卷末には、「梨春先生撰述書目 望雲堂」
として、計十八点の書目を掲載する。

○『竜宮船』（四卷四冊）

見返し「竜宮船／全部／四卷」。

序末「宝曆癸酉孟春東都張朱鱗書於梧陰庵／印」。

刊記「宝曆四^{甲戌}年正月吉辰／東都 書肆 鶴本平

藏」。

○『甘蔗記』（二冊） 宝曆十三年、刊 ※筆者未見

本書は「梨春先生編輯書目 梧陰庵」にもその書名が
掲載されている。

○『紅毛談』（二卷二冊）

書袋「梨春先生著／乙酉／試筆／紅毛談／梧陰庵
藏」。

見返し「梨春先生著／乙酉／試筆／紅毛談／梧陰庵
藏」。

序末1「爾明和乙酉之春桂川甫三国訓撰／印」。

序末2「明和二年乙酉春正月雜日東都後藤光生梨春書

于梧陰庵印」。

本書の卷末には、「梨春先生編輯書目 梧陰庵」とし
て、計十五点の書目を掲載する。また、本書の柱には「梧
陰庵藏」とある。

○『震雷記』（二卷一冊）

序末「躋寿館総理 大洲田澄元 参訂」。

刊記「明和丁亥春上元日不貪山人写於銭神宮中／東

都日本橋／須原屋茂兵衛開版」。

本書の卷末には、「梨春先生編輯書目 梧陰庵」とし
て、計十八点の書目を掲載する。また、本書の柱には「梧
陰庵藏」とある。

以上が現存する梨春編著の出版物だが、これらを一覽
して気がつくのは、宝曆期までを中心に江戸の書肆・鶴
本平藏（常春、望雲堂）が梨春編著の出版物に多く関わっ
ているということである。

なお鶴本平藏については、本間正幸による一連の論考
で言及されている（注7）。それによると、鶴本平藏は宝

曆期に盛んに活動した書肆で、江戸俳壇に顔の聞いた人物であったろうが、その人物像は依然不明とのことである。また、本稿で後述する梨春との関係、および稿を改めて述べる予定の『竜宮船』を中心とした類版問題等に関しては、従来指摘がない。

三、鶴本による梨春名義の出版物

既に中野三敏による紹介(注8)も備わるが、『春秋七草』『都老子』に付載される望雲堂の「梨春先生撰述書目」、および『震雷記』『紅毛談』に付載される梧陰庵の「梨春先生編輯書目」には、梨春が撰述・編輯したとされる種々の書目が示されている。

しかし、その中には純然たる梨春編者の著作物としては扱えないものもあることが、筆者の調査によって明らかとなった。それは次の三点である。

- ① 『温泉名勝志』
- ② 『燧石囊』
- ③ 『芭蕉行状記』

右の三つはいずれも望雲堂の「梨春先生撰述書目」(【図1】)に掲載されるものである。また、当該書目一覧の中には書名の下に「近刻」や「未刻」という文言の付されたものがあるが、右三点については何も記されていない

ことから、既刊扱いであると言える。

梨春先生撰述書目		望雲堂	
物産目録	左傳名物解	調辯道	近刻
都老子	經學策	未刻	未刻
温泉名勝志	百花譜	同	同
河豚禪	天錦鈔	同	同
燧石囊	珍方圖	同	同
尺八志	大便經	同	同
春秋七草	和漢合鑿本草	同	同
龍宮船	近刻	未刻	未刻
日本	芭蕉行状記		

【図1】『都老子』付載「梨春先生撰述書目」(注9)

ではこれら三つの出版物について、その書誌情報を確認してみよう。

① 『温泉名勝志』(二巻二冊)

見返し「梨春先生撰述書目 望雲堂」(計十八点の書

目を掲載する)(注10)。

序末「梧陰庵梨春／印」。

上巻(『湯山土産』本文末「源義方印」)。

下巻(『山路の月』跋末「喜多村寛慶記之」)。

刊記「寛延四辛未五月中旬／桜田和泉町鶴本平蔵板」。

本書『温泉名勝志』(上下冊外題・序題)は、上巻『湯山土産』(上巻内題)、下巻『山路の月』(下巻内題)の

二部より構成され、上巻と下巻は別々の著作である。また、『温泉名勝志』の巻頭には梨春による序文が備わっており、上巻と下巻を合わせた状態で書肆・鶴本平蔵から寛延四年（一七五一）に出版されている。

そこで、まず『温泉名勝志』上巻の『湯山土産』について調べてみると、この著作は鶴本版よりも早い段階で、江戸の書肆・吉田宇右衛門より『湯山土産』単体で既に刊行されていた。また、吉田版『湯山土産』の本文末尾には「元禄壬申八月二十八日 源義方印」、刊記には「于時正徳五年^{乙未}仲秋下旬^{武城}吉田宇右衛門版」とある。加えて、吉田版と鶴本版の版本を比較したところ、両者は同一の版木を使用し、吉田版の本文末尾にあった年次および刊記を後年に出版された鶴本版では削除していることが明らかとなった。よって、吉田版『湯山土産』が初版本、鶴本版『温泉名勝志』上巻が吉田版の修訂求版本本であると言える。

次に『温泉名勝志』下巻の『山路の月』だが、本書の成立事情については、寛延四年（一七五一）に鶴本平蔵より出版された『温泉名勝志』掲載の梨春による序文が手がかりとなる。そこで、以下にその全文を引用する。

家君（＝梨春の父・義方）栖鸞過し年、相州へ湯あみせし頃、名区勝境を尋て、山水のうるはしきに心をあそばしめ、風土の目でたきに目をよろこばしめ

て、幽賞やまず、其見きける所をありのまゝに記し置く文あり。『湯山土産』と名づけて、稚子門に候つての設けとせり。又の年、湯あみせしに帰るさには、鎌倉・金沢の名勝をたづね記し、『山路の月』とかりに名づけて、親しき友どちの土産とせり。しかるに門外の君子の見給ふべき文章ならねば、年久しく匣の中に蔵しぬ。此頃、望雲堂鶴本のぬし頻りに世に行はん事を乞ひぬ。辞するにいなみがたく、揚州に至らん望にまかせあたへ侍りぬ。

この序文から、『温泉名勝志』上巻にあたる『湯山土産』および下巻にあたる『山路の月』の著者は、梨春の父・義方であることが分かる。また傍線部について、先述の通り『湯山土産』は正徳五年（一七一五）に吉田宇右衛門より刊行されていたが、『山路の月』に関してはその執筆後に刊行された形跡はなく、写本のまま眠っていたものと思われる。そこに鶴本平蔵からの懇願があり、『湯山土産』と『山路の月』を合わせて『温泉名勝志』と新たに題し、寛延四年（一七五二）の刊行に至ったのである。以上のように、『温泉名勝志』は梨春の父・義方が著した、既刊の『湯山土産』および未刊の『山路の月』という本来別々の著作をもとに、寛延四年（一七五一）の時点で鶴本によって再構成された書物なのであった^{（注1）}。

② 『燧石囊』(五卷一冊)

筆者が調査した限り、『燧石囊』という書名をもち、梨春やその周辺人物が関与した現存する出版物は見当たらなかった。ただし、江戸の本屋仲間による自己検閲記録「割印帳」を確認すると、宝暦元年(一七五一)十二月に検閲を受けた記載欄に、「同(寛延)四未五月／火うち袋／墨付三十九丁／作者／梨春 全一冊／板元鶴本平兵衛／売出し 同人」とある。この『火うち袋』と『燧石囊』は実質的には同一書物と考えられ、また鶴本平兵衛は鶴本平蔵と同一人物かその親類であろう。

右の「割印帳」の記載を踏まえ、改めて『燧石囊』(『火うち袋』)に相当するであろうものを調べたところ、多田義方が執筆した『草の螢』がそれに該当すると判明した。そこで、以下に『草の螢』の出版事情を記す。

まず本書は江戸の書肆・吉田宇右衛門より刊行されており、吉田版の序末には「正徳五のとし乙未の初秋喜多村寛慶書之」(注12)、跋末には「正徳五年乙未仲秋 多田義方印」(注13)、刊記には「武江 彫工 吉田宇右衛門」とある。

その後、本書は吉田版と同一版木を用いて、鶴本平蔵より改めて出版された。ただし、鶴本版の序末には「梧陰庵梨春書」、跋末には「多田義方印」、刊記には「寛延四辛未五月中旬／桜田和泉町鶴本平蔵板」とある。すなわ

ち、鶴本版では吉田版の序末の年次および序者名、跋末の年次、そして刊記のすべてをそれぞれ削除し、右のように修訂したのである(注14)。よって、吉田版が初版本、鶴本版が吉田版の修訂求版本であると言える。なお、吉田版と鶴本版は、ともに五卷一冊・墨付三十九丁である。

以上を踏まえ、出版年次・墨付丁数・作者・冊数・板元の一致もしくは類似より、鶴本版『草の螢』が「割印帳」の『火うち袋』(『燧石囊』)に該当すると判断できよう(注15)。このように、①と同様、②でも鶴本平蔵は梨春の父・義方の著作を梨春名義で出版していたのである。

③ 『芭蕉行状記』(二卷一冊)

序末1「后臥看識印(□)／陰(印) (梨／春)」。
序末2「硯田舎紀逸述／印印」。

刊記「寛延四辛未九月／東都／桜田和泉町／鶴本平蔵 梓印(朱印陰刻「常春／之印」)」。

本書の編著者は、松尾芭蕉の弟子・路通である。『俳文学大辞典』(角川書店、一九九五年)によると、本書はまず元禄八年(一六九五)に京都の書肆・井筒屋庄兵衛より刊行されたという(注16)。

そして、右に示した鶴本版では、「芭蕉翁行状記」(外題・序題)、「行状記」(内題)とあり、望雲堂の「梨春先生撰述書目」に載る「芭蕉行状記」という書名そのもの

のは見当たらない。しかし、『芭蕉行状記』と『芭蕉翁行状記』は実質的には同じものである。

井筒屋版と鶴本版は刊行年次の先後関係より、井筒屋版が初版本、鶴本版が井筒屋版の求版本もしくは再版本と推察される。

なお鶴本版について、『俳文学大辞典』では「寛延四年（一七五一）の後刷本がある」とし、注7所掲の本間論考では「再版本」としている。また本間は、再版に際しては初版本に編集の手が加わっていることを指摘した上で、編集が誰の手によって行われたかは判然としないとも述べている^{〔注7〕}。この点については別稿で改めて指摘する予定だが、結論のみを先に示せば、書肆鶴本の要請によって編集が施されたものと考えられる。

以上、望雲堂の「梨春先生撰述書目」に掲載される①『温泉名勝志』、②『燧石囊』、③『芭蕉行状記』の三点は、もともと梨春とは別の人物による著作物であり、①と②は梨春の父である多田義方の著作、③は路通の著作であった。そして、①の上巻にあたる『湯山土産』、および②や③については、鶴本以外の書肆から既に刊行されていたものを寛延四年（一七五一）の時点で鶴本が改めて出版したものであったのである。

ここで再び「割印帳」を確認すると、宝暦元年

（一七五一）十二月に検閲を受けた記載欄に、①「温泉名勝志／墨付八十九丁／作者／元梨春 全二冊／板元

鶴本平兵衛／売出し 同人」、②「同（＝寛延）四末

五月／火うち袋／墨付三十九丁／作者／梨春 全一冊／板元 鶴本平兵衛／売出し 同人」とあり、また寛延四年（一七五一）九月に検閲を受けた記載欄には、③「同

（＝寛延四年）九月／芭蕉行状記／墨付二十六丁／義仲寺考三 全一冊／板元売出し 鶴本平蔵」とある。

このように、①～③はいずれも寛延四年（一七五一）の時点で既に鶴本平蔵もしくはその縁者に版權が移っており、のちの出版にあたっては重版には該当しなかった。また、「割印帳」では③の作者は「義仲寺考三」となっているが、望雲堂の「梨春先生撰述書目」に本書名も掲載されていたことは先述の通りで、鶴本の認識では①や②と同じように、③もまた梨春の著作物として売り出さうとしていたと言える。つまり、①～③について、梨春当人の認識は不明だが、少なくとも書肆鶴本は寛延四年（一七五一）に出版を企てた際に、梨春の名義を利用してこれら売り広めようとしていたのである。そしてこのことは、宝暦当時にあつては、後藤梨春という人物がある程度の知名度を獲得していたことをも意味するのであった。

四、おわりに

本稿では、宝暦期までを中心に江戸の書肆鶴本が梨春編著の出版物に多く携わっていたことを端緒として、梨春と書肆鶴本の関係を考察した。その結果、実際には梨春以外の人物が執筆していた①『温泉名勝志』（多田義方『湯山土産』『山路の月』）、②『燧石囊』（多田義方の蝨）、③『芭蕉行状記』（路通『芭蕉翁行状記』）に対して、鶴本は梨春の名義を利用しながらそれらを出版していたことが明らかとなった。

こうした名義利用の実態は、宝暦当時における梨春の知名度の高さを窺わせると同時に、鶴本が出版に携わった梨春編著の出版物の背後には、鶴本による何らかの意向が反映されている可能性をも示唆している。この点については、稿を改めて述べることにする。

注

- (1) 以下、梨春に関する伝記事項は、日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本生物学史』第一巻（新訂版、野間科学医学研究資料館、一九八〇年。初出一九六〇年）、二八二～二八五頁、中野三敏「静観坊まで―談義本研究（五）―」（中野三敏『戯作研究』所収、中央公論社、一九八一年。初出一九七三年）、二一八～二二三頁、『国

書人名辞典』第二巻（岩波書店、一九九五年）「後藤梨春」項、磯野直秀『日本博物誌総合年表』「総合年表編」（平凡社、二〇一二年）・明和八年四月八日条、三二八頁ほか参照。とくに梨春の生年については、元禄九年説（『明治前日本生物学史』）、同十年説（『国書人名辞典』）、同十五年説（中野、磯野）といくつかあるが、本稿では原念齋の「史氏備考」巻二十六に載るといふ「後藤梨春墓記」に基づく元禄十五年説をとる。なお、ほか二説の根拠は示されていない。梨春の墓は江戸芝愛宕下青松寺にあるというが、現存不明。

- (2) 多田義方は元禄七年（一六九四）三月二十日あまりから江戸より難波に向かつて旅をするが、その時の紀行文を『草の蝨』（第三節で後述）としてまとめている。その道中において、義方は現兵庫県の多田神社に立ち寄り、そこに祀られる源満仲の七百回忌（元禄九年（一六九六））についても書き記し、続けて次のように綴っている。

〔上略〕をそれおほくも某（＝義方）とをつおや、此所（＝多田の庄）より出、其むまご、管領なりし畠山氏にしたがひ、能登にくだり、七尾といへる城をまもりけるに、鱷カサガヒ有て、五代のとをつおやはらから五人、国のために命をおとしぬ。一人たま／＼いき残り、沈落シヨクのあまり他の氏を名乗来しかど、それがし今としより本姓にかへる時しも御社ミヤにまふで、ありがたくもころのうち、

もうしごととして、かたじけなさに涙こぼれぬ。(下略) (吉田版『草の螢』『浦の波』)

傍線部の記述から、義方は元禄九年(一六九六)の時点で本姓の多田に改めたと思われ、それ以前については義方の息子である梨春が後藤姓を名乗っていることから、おそらく義方も後藤姓を使用していたと考えられる。

(3) 梨春が躋寿館都講を務めていたことについて、従来の研究書ではその根拠が示されていなかった。しかし、国立国会図書館に所蔵される『草木鳥獸之図』(請求記号・特1-935)の巻末識語に「明和二乙酉十一月冬至／躋寿館都講後藤光生寄附／匣(鼎型朱印「梨／花／春」)とあることから、本書が梨春自筆本で、かつ明和二年(一七六五)十一月時点において既に躋寿館都講となっていたことが確認できる。なお、磯野直秀による本書の解題が「国立国会図書館デジタルコレクション」より閲覧できる。

(4) 拙稿「後藤梨春『都老子』論 本草学と「老子」との連繫―」(『雅俗』第十七号、二〇一八年七月)。のち、博士論文「近世中期の思想と文学―天文暦学・本草学との関わりから―」(九州大学、二〇二〇年)において一部修正。

(5) 『竜宮船』については別稿を予定している。

(6) 拙稿「平賀源内「根南志具佐」のカッパ図」(『近世文藝』第一一二号、二〇二〇年七月)。

(7) 本間正幸「別座鋪」版本考―再版本の位置付けを中心に―」(『連歌俳諧研究』第九十二号、一九九七年三月)、

同「再版本の『キズ』跡―「別座鋪」版元不明本をめぐって―」(『成城国文学』第十四号、一九九八年三月)、同「芭蕉翁行状記」の諸本と問題点(『文叢』第三十七号、二〇〇三年三月)、同「橘屋本『芭蕉翁行状記』における刊記の問題―「蕉門書林」型刊記の上限をめぐって―」(『連歌俳諧研究』第一一三号、二〇〇七年九月) など。

(8) 注1中野三敏「静観坊まで―談義本研究(五)―」。

(9) 『春秋七草』と『都老子』それぞれに付される望雲堂の「梨春先生撰述書目」は同一版木を使用している。

(10) 『温泉名勝志』付載の「梨春先生撰述書目」は【図1】と同じ版木を使用しているが、末尾に記される『芭蕉行状記』の部分のみ仕様が異なっており、文字の大きさも不自然であるため、入木かと思われる。

(11) 「日本古典籍総合目録データベース」によると、杏雨書屋乾々齋文庫に寛延四年(一七五二)刊の『山路の月』が一点現存しており、著者を喜多村寛慶としている。しかし、筆者が当該書(請求記号・乾0669)を実見したところ、本書は鶴本版『温泉名勝志』下巻の『山路の月』が単体で残ったものであると判明した。また、『山路の月』の喜多村寛慶による跋文には、次のようにある(以下、全文引用)。

「此一冊は、さきのとしゆあみんとて、彼さかひに入て、山ふところをさがし、水のくまぐとめありきし青山、夢に入の忘れがたきを、またの秋、幸に萱堂のおぼし立給ふめるけしきをたすけ、いもうとだつ人とともにしたがつひゆかれし時を感じ、興を発すに詞花をかざらず、言葉をもとせざして、里民の物がたりまで載せる。是作者の心ざしをたつる所にして、もはら孝養をつとめ、慈弟をよくし、生理をはぐめる日用常行、まことにそなはり、をよその人をして病なるべきをや、かつ文章にをける、其中を閑にして、其外を肆にせるのいひならんかし。／喜多村寛慶記之。」

傍線部の表現は『山路の月』の著者自身ではない、別の人物の視点から跋文が記されたことを示しており、この点からも『山路の月』の跋文を書いた喜多村寛慶が『山路の月』の著者であるとは言えない。

なお、杏雨書屋には『温泉名勝志』上巻の『湯山土産』（請求記号・乾5980）も単体で存している。

(12) 吉田版『草の螢』の喜多村寛慶による序文には、次のようにある（以下、全文引用）。

「多田氏義方のぬし、函の底にひめをける草稿あり。そのかみ、宮古方にさまよひ、名区勝境を尋て、山林のうるはしきにこゝろをあそばしめ、風土のめでたきに目をよろこばしめて、幽賞やまず、其見きける所をありのまゝ

にしるせるなるべし。しかるを、とし経て、蠹のすみかのむかし文となさんはおしげなる物にしつゝ、あらたに書あらためん事をしめさる。余がつたなさをもち、強になびてんは、勞をいとふに似たれば、五ひら三ひらと筆をしたてゝ、かいつもり、そこばくの紙を汚しぬ。それが中にしも、此五しなをわかちいでゝ一帖となし、より所あらむ外題を需らる。とてもゆるさるまじう、ふかくおもひ、あまねくうがてるは、作者のほるとせざる所にして、我いとかたはなれば、何となく恵慶法師が「水茎の跡ふみならず」と読る、ことの葉にすがりて、名によはまほしきを、ことたがひ、ことはりそむくべくは、いかゞはせんは。／正徳五のとし乙未の初秋喜多村寛慶書之。」

この喜多村寛慶による序文のうち、傍線部は前述した『温泉名勝志』の梨春による序文の一部（『湯山土産』に關する説明部分）へと編集利用されている。

(13) 吉田版『草の螢』の多田義方による跋文には、次のようにある（以下、全文引用）。

「見而書之、聞而記之。里々村々残火残月、腹稿乎、隨筆乎、俟其人耳。／正徳五年乙未仲秋 多田義方圍。」

(14) その他、吉田版序文冒頭の「多田氏義方のぬし」（注12参照）を鶴本版では「予同氏義方のぬし」と修訂している。

これは序者名を喜多村寛慶から後藤梨春に変えたことに

伴う修正であろう。

- (15) 底本として使用した国立国会図書館所蔵の鶴本版『草の螢』について、その書誌情報を「国立国会図書館サーチ」より確認すると、本書の別書名を『火打袋』としている。しかし、原本を写真したところ、本書内に『火打袋』といった書名の記載は確認できなかった。また、佐村八郎『国書解題』（増訂版、吉川半七ほか、一九〇四年）や『日本古典籍総合目録データベース』でも『草の螢』の別書名を『火打袋』とするが、その根拠は明示されていない。
(16) 『俳文学大辞典』（角川書店、一九九五年）『芭蕉翁行状記』項（阿部正美執筆）を参照。筆者は原本未見。
(17) 注7のうち、とくに本間正幸『芭蕉翁行状記』の諸本と問題点¹⁾において述べられている。

使用テキスト

本稿での引用は読解の便を考慮して、清濁や句読点、ルビや表記などを私に改め、傍線等を施した箇所がある。またとくに断りのない限り、古典籍からの引用における括弧内の記述は筆者によるものである。

- 『草の螢』（吉田版）東北大学附属図書館狩野文庫蔵本（請求記号：ナ1261-1）。マイクロフィルム（『東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成』第4門 語学・文学）、丸善、MF番号：DHA0020300）より閲覧。（鶴本版）国立国会

図書館蔵本（請求記号：149-39）。

- 『温泉名勝志』国立国会図書館蔵本（請求記号：166-47）。
● 『割印帳』江戸本屋出版記録「上巻（書誌書目シリーズ10、ゆまに書房、一九八〇年）。

書誌情報依拠資料

- 『河豚禪』無窮会神習文庫蔵本（『日本古典籍総合目録データベース』を参照）。
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_3885754
● 『春秋七草』国立国会図書館蔵本（請求記号：特1-2026）。
「国立国会図書館デジタルコレクション」より閲覧。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541261>
● 『本草綱目補物品目録』北海道大学附属図書館札幌農学校文庫蔵本（請求記号：508/GO）。『日本古典籍総合目録データベース』より閲覧。
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100259344
● 『都老子』九州大学附属図書館読本コレクション蔵本（請求記号：読本III/宝暦2/ナ1-1-4）。
<http://hdl.handle.net/2324/1000153927>
● 『竜宮船』大阪大学附属図書館忍頂寺文庫蔵本（請求記号：228-13-8）。『日本古典籍総合目録データベース』より閲覧。
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100080518
● 『甘蔗記』山中進治旧蔵山中文庫蔵本（『日本古典籍総合目録データベース』を参照）。

録データベース」を参照)。

http://dbrec.nij.ac.jp/KTG_W_2262319

- 『紅毛談』 早稲田大学図書館蔵本 (請求記号: 文庫 08 C0200)。「古典籍総合データベース」(早稲田大学)より閲覧。

http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0200/index.html

- 『震雷記』 国立国会図書館蔵本 (請求記号: 特1-3436)。「国立国会図書館デジタルコレクション」より閲覧。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537097>

- 『温泉名勝志』 国立国会図書館蔵本 (請求記号: 166-47)。
- 『湯山土産』 国立公文書館内閣文庫蔵本 (請求記号: 177-0992)。「国立公文書館デジタルアーカイブ」より閲覧。

<https://www.digital.archives.go.jp/img/1213435>

- 『草の螢』(『火燧囊』) [吉田版] 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本 (請求記号: 411251-1)。マイクロフィルム (『東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成』第4門 語学・

文学)『丸善、MF 番号: DHA0020300』より閲覧。[鶴本版] 国立国会図書館蔵本 (請求記号: 149-39)。

- 『芭蕉翁行状記』(『芭蕉行状記』) [井筒屋版] 『俳文学大辞典』(角川書店、一九九五年)「芭蕉翁行状記」項 (阿部正美

執筆)を参照。[鶴本版] 国文学研究資料館所蔵紙焼資料 (請求記号: D9279。底本所蔵者は愛知県立大学附属図書館)より

閲覧。なお、同資料館の紙焼資料は白黒印刷のため、刊記

における鶴本平蔵の朱印陰刻については、国立国会図書館蔵本 (請求記号: 京乙 383) より確認した。

付記

本稿は、博士論文「近世中期の思想と文学―天文暦学・本草学との関わりから―」(九州大学、二〇二〇年)の一部および二〇二一年度おのみち文学三昧(於オンライン)における口頭発表の一部に基づき、加筆修正を施したものである。席上および発表後にご教示を賜った諸氏に厚く御礼申し上げます。また、資料の閲覧・利用を許可くださった関係機関に深く感謝申し上げます。

なお、本稿は JSPS 科研費 JP21K12918 の助成を受けたものである。

— よしだ・つかさ 日本文学科講師 —